世界へ発信！

北の縄文だより vol.8

縄文 JOMON JAPAN

～みんなの知らない「JOMON　World」～

社会教育課社会教育・文化財グループ（☎ 74-3010）

縄文人の祈り～お墓～

ヒトはこの世に生まれ、いつかは必ず寿命が尽きる時がきます。縄文人にとって「死」は今よりもずっと身近で、免れないものと感じていたでしょう。ヒトが亡くなった時、縄文人も、現代の私たちと同じように墓をつくり、大切に埋葬していたことがわかっています。

お墓が見つかる場所

入江・高砂貝塚では、合わせて44基の墓が貝塚の中から発見されています。これは、縄文人が貝塚を特別な場所と考えていたからだと言われています。

貝塚から見つかるたくさんの動物の骨や土器などの道具は、縄文人にとっては単なる「ゴミ」ではなく、この世での役割を終えた大切な品々で、亡くなったヒトと同じように、ていねいに埋葬したのかもしれません。

▶墓に入れられた副葬品

母と子のお墓

高砂貝塚で見つかった母と子の墓

高砂貝塚では、縄文時代晩期の墓で、一つの墓に母親と赤ちゃんが埋葬されているのが見つかりました。母親は赤ちゃんを産む前に、ともに亡くなってしまったと考えられています。

このお墓では、頭をほぼ南に向けていることや、赤い顔料（ベンガラ）がたくさんふりまかれていた点など、高砂貝塚で見つかったほかの墓とは違った埋葬の仕方をしていました。

出産は新しい生命を生み出すことです。それは共同体にとって、とても重要な出来事でした。縄文時代には出産や妊婦を象徴する土器や土偶が数多く作られていることからも、出産に対する縄文人の思いが伝わってきます。だからこそ、生まれることなく亡くなってしまった赤ちゃんとその母親のお墓をつくった縄文人は、特別な思いを抱いて埋葬したと考えられるのです。

助け合って生きた縄文人

入江貝塚では、もうひとつ縄文時代の生活文化を考える上で重要な発見がありました。縄文時代後期の墓から発見された人骨で、座った状態に近い格好で埋葬され、遺体の上には円れきが積み上げられていました。

埋葬されていた人骨は、頭や背骨は通常の大人と変わりませんが、四肢骨（手足の骨）が異常に細かったのです。これは手足の筋肉を長い間動かすことができなかったためと考えられます。つまり、この人は何らかの病気で幼少期より自分の力で立つことすらおぼつかず、常に介護が必要な状況であったことが伺えました。

これまで頭蓋骨の大きさなどから女性と考えられてきましたが、近年、ＤＮＡの分析によって男性であることがわかりました。病気の原因としては、ポリオ（小児マヒ）や筋ジストロフィーなどが考えられています。

入江貝塚で見つかった病気だった縄文人の骨

このような日常生活に支障をきたす障がいを抱えたヒトも、寿命が尽きるまで、少なくとも十数年間を過ごしていたことから、周囲の手厚い介護があったと想像されます。こうした情景からは、助け合って生きる慈愛に満ちた縄文人の姿が浮かび上がってきます。